



TITLE:

# シスモンディ・ロマン主義の再検討(上)

AUTHOR(S):

長岡, 延孝

---

CITATION:

長岡, 延孝. シスモンディ・ロマン主義の再検討(上). 経済論叢 1987, 139(2-3): 220-235

ISSUE DATE:

1987-02

URL:

<https://doi.org/10.14989/134189>

RIGHT:

# 經濟論叢

第 139 卷 第 2・3 号

---

電電公社民有化會計の經濟的歸結(1)……………	醍 醐 聰	1
『資本論』第 2 卷第 3 篇「社会的總資本の 再生産と流通」における外国貿易捨象の 命題について(下)……………	板 木 雅 彦	24
シスモンディ・ロマン主義の再検討(上)……………	長 岡 延 孝	40
ソーシャル・ダンピング論議について……………	奥 和 義	56
市場形態・生産形態と需要不確実性下の 企業行動モデル……………	竹 治 康 公	75
金融リース會計の生成……………	小 野 武 美	93

經濟学会記事

---

昭和 62 年 2・3 月

京 都 大 學 經 濟 學 會

## シスモンディ・ロマン主義の再検討 (上)

長岡延孝

## I はじめに

本稿の意図は、従来から「ロマン主義者」と称されてきたシモン・ド・シスモンディの思想を再検討することである。

近代合理主義に対して反対派が攻撃に出る時が歴史上幾度かあったが、18世紀啓蒙の「反動」とされるロマン主義の思潮は、それらの中でもあのルネサンス運動に比肩されるほど大規模なものであった。ロマン主義思潮は主に芸術分野で言及または研究されてきたが、その社会思想史的側面に関する研究は多いとは言えない。現実社会との関連で捉えられたロマン主義の評価は従来から大体二つあった。一つは、それを前近代的な封建イデオロギーの表明とみなし、貴族的の起源または反動的役割を強調する立場である<sup>1)</sup>。これに対し、例えばカール・シュミットは合理的因果性を拒絶する「機会原因論」としてロマン主義を定義し、それを市民精神の現れとみて一定の進歩的役割を評価する<sup>2)</sup>。このふたつである。両大戦間から第二次大戦にかけての時期に、アーサー・ラウジョイが哲学史を踏まえてロマン主義を本格的に位置付けることになる。彼は、当時の悲劇的状况と前世紀のロマン主義の知的革新との間にある歴史的関連性を押さえ、この精神に含まれる、後の政治的思惟と感情に影響を及ぼした根本的諸要素を指摘する。すなわち、有機体思想・過程と努力の優位性・多様性尊重

1) 例えば、F. Mehring, *Deutsche Geschichte*, 1910. (栗原佑訳『ドイツ社会文化史』1946年。) および、K. Mannheim, *Das Konservative Denken*, 1927. (森博訳『歴史主義・保守主義』1969年。)

2) C. Schmitt, *Politische Romantik*, 1919. (橋川文三訳『政治的ロマン主義』1982年。) 井上純一「カール・シュミットとナチズム」(徳永恂編『社会思想史』1980年、第6章)参照。

の三点である<sup>3)</sup>。戦後になるといわば政治的ロマン主義とは直接的な縁の切れたところから研究が進められた。その貴重な成果がH・G・シェンクの『ロマン主義の精神』<sup>4)</sup>である。彼はこの中で、ロマン主義の思想と感情の諸性格およびその行方を歴史的分脈に置いて丹念に描出している。彼は、序文でI・バーリンが指摘する様に、「キリスト教の正統的信仰の衰退とそこにつくり出された精神的荒廃から逃れる手段の絶望的な探求」という視角からこの複合的運動を跡づけている。しかしシェンクは、「ロマン主義があらゆる立場を評価しようとしたこと」は「それまで絶対と考えられてきた道徳的基準を次第に弱体化させることになった」<sup>5)</sup>として、価値観の多様化傾向を否定的に捉えるが、それには賛同しかねる。つまり客観的な一元論——その典型はフランス啓蒙思想——に対するロマン派の攻撃もしくは疑念は、むしろ彼らの功績である。ロマン主義の遺産である価値の多元性尊重は現代にも脈々と生きている。この態度は積極的に受け止められねばならないだろう。

ところで、本稿で考察の対象とするシスモンディは多様な解釈を許す思想家である。経済思想史の上で、一方で彼の中に資本主義以前の社会制度を賞揚する前近代性格を見る者<sup>6)</sup>もいれば、他方で経済的自由主義を批判し干渉主義を唱道したとみなす論者<sup>7)</sup>もいる。さらには社会主義の先駆者と考えられることもある<sup>8)</sup>。理論史の上では主に過少消費説的な恐慌論の創始者として従来から知られ、我が国においても一定の研究成果が蓄積されている。現在の研究水

3) A. O. Lovejoy, "The Meaning of Romanticism for the Historians of Ideas", *Journal of the History of Ideas*, Vol. II, No. 3, June 1941, pp. 257-278.

4) H. G. Schenk, *The Mind of the European Romantics: An Essay in Cultural History*, 1966. (生松・塚本訳『ロマン主義の精神』1975年.)

5) *ibid.*, p. 44. (訳書, 57ページ.)

6) 中野正「シスモンディ」『経済学説全集』第4巻, 1954年。堀新・『フランス経済思想史』1959年。

7) Ch. Gide et Ch. Rist, *Histoire des doctrines économiques*, 1909. (宮川貞一郎訳『経済学説史』1936-1938年.) 有効需要論の側面で評価するのは、中村賢一郎と岡田純一である。(中村賢一郎「市場=実現理論の古典的二類型」『政経論叢』第29巻第4号, 1960年。岡田純一『フランス経済学史研究』1982年.)

8) E. Roll, *A History of Economic Thought*, 1939. (隅谷三喜男訳『経済学説史』1951-1952年.)

準は吉田静一によって代表される<sup>9)</sup>。彼は、学史上リカードとは対照的に、シスモンディは資本の現実的運動の影の側面を分析することによって古典経済学を補完したとしている。本稿では吉田の研究を純粹理論的には前提する。

だがこの多面的なシスモンディをできる限り統一的に理解するために、もう少し彼の思想の根源に溯って、彼の経済学を支える人間観、価値観、資本主義観等を再検討し把握しようとするならば、いま一度彼を当時の社会思想史および社会状況の文脈に置いてみる必要があるだろう。本稿の目的は、まず第一に「経済学的ロマン主義者」と評されるシスモンディの経済思想を吟味し直し、ロマン主義の現代の研究に則ってそのロマン主義的側面を明らかにすることである。ある論者によれば、「今まで、シスモンディの経済学は『経済学的ロマン主義』として語り伝えられてきたが、そのぼあい、人は、彼のロマン主義がどういうものであったかを問いもしないで、ただ漠然と、プチブルの幻想的な私念というほどの意味を、このロマン主義という言葉に託してきたかにすぎないかのようである。」<sup>10)</sup> レーニンの有名な規定<sup>11)</sup>にもかかわらず、依然としてその内容は曖昧なのである。私の理解するシスモンディ像、経済学的ロマン主義像を、主著『政治経済学新原理』<sup>12)</sup>を中心に、そして必要な限りで同一線上にある『政治経済学研究』<sup>13)</sup>を参考にして提示することが、第一の目的となる。結論を先取りして言えば、大革命を挟む時期の社会思想史の流れに彼を置くと、彼の精神的気質はむしろ18世紀啓蒙の延長線上にある。しかし合理主義的一元論

9) 吉田静一『フランス古典経済学研究』1982年。吉田によれば、シスモンディは、①資本と労働の自由な移動の困難性、②所得論の側面(タイム・ラグ論的視角と競争論的視角)からの生産過剰、を論証することによって販路説に批判を加えた。

10) 平田清明「シスモンディの分割地所有論——経済学的ロマン主義の特徴づけに寄せて——」『商学論集』(1)第29巻第4号、1951年、62ページ。

11) Ленин, К характеристике экономического романтизма, 1897. (田中雄三訳『経済学的ロマン主義の特徴づけによせて』1974年。)

12) J. C. L. S. de Sismondi, *Nouveaux principes d'économie politique, ou de la richesse dans ses rapports avec la population*, 2 vols., Paris, 1819, 2<sup>e</sup> éd., 1827. (以下第二版を使い、N. P. と略す。) (菅間正朔訳『経済学新原理』(上)1949年(下)1950年。)

13) J. C. L. S. de Sismondi, *Etudes sur l'économie politique*, Paris et Bruxelles, 1837-1838. (以下1980年にジュネーヴで出版された、ブリュッセル版のリプリントを使い、E. E. P. と略す。)

を信奉しながらも、その反面で多様性を尊重する。彼の内部で両者は相克状態にある。この二重性こそシスモンディのロマン主義を特徴づけるものである。そして経済思想上、一元的理想社会への疑念から、国民経済を中心とする思考へと道を拓くことになった。

次に、シスモンディのロマン主義を明らかにすることは、当然のことながらフランス・ロマン主義の性格の解明にも通じるであろう。ロマン主義思潮は極めて複雑であり、各国のロマン主義もそれぞれに独自性を持っている。例えばドイツと比較すれば、市民社会の確立の差異もあって、総じてフランスのロマン主義は個人を重視し現実に即そうとする傾向がある。シスモンディも現実の動向に絶えず眼を向け、現実感覚を失うことはなかった。これが彼の経済学にも重要な刻印を印している。

おおまかに言って、以上の二点が本稿の目的である。

## II ロマン主義思潮とシスモンディ

スミス経済学のフランスへの導入者として J. B. セイと並んで知られていたシスモンディが、1819年『政治経済学新原理』を著すことでスミスの批判者に「転向」を遂げたことは、通説となっている<sup>14)</sup>。この転向の契機となったものの重要な一つに、ロマン主義の精神がある。この事実をもって強調されてよい。というのは1804年から10年余りもの間、彼はスタール夫人がジュネーヴ郊外の Coppet で主催するサロンに積極的に参加し、様々な知性と交際したからである。時に彼は三十歳代であり、本格的に仕事を成そうとしていた時期でもあった。サロンの参加者には、夫人のほか、アウグスト・ヴィルヘルム・フォン・シュレーゲル、ヨハネス・フォン・ミュラー、パンジャマン・コンスタンらがあり、活発な議論の渦中でシスモンディも強烈な刺激を受けた。彼らの多くは18世紀啓蒙の教育を受けながらも、ヨーロッパ各国とりわけドイツを旅して啓蒙を相

14) 「転向」を通説として確認した論文として、中村賢一郎「シスモンディと転向問題」（『政経論叢』第32巻第2号、1963年）がある。

対化する視座を得たのだった。

ロマン主義を考察するにあたって、啓蒙の思想を必要な限りで顧みておかねばならない<sup>15)</sup>。18世紀フランスのフィロゾフ達は各人独創性に富む思想家だったが、それでも共通の基盤に立っている。啓蒙の哲学は人間の本質を基本的に理性に求め、人間性は時と場所を通じて変わるものではないと考えた。人間は「改善能力」を固有に持つ存在で、ベルフエクワイビリテ外的環境と内面的知性両方の角度から人間精神を改善してゆく。社会の諸悪も、その解決は人間自身に委ねられており、決して他力本願ではない。人々が有徳になれば幸福かつ平和な社会が到来するはずであり、また誰もがそうした社会に向けて精進を積み重ねるものである。社会は、そうした理性的個人がいわば契約という合理的手続きを経て形成されたとみなされる。啓蒙における社会観は機械論的である。知識の増大は科学と技術を進歩させると同時に、人々の知的、精神的能力を開発する。人間社会は、一進一退を繰り返しながらも、大局的にみれば将来の「完全な社会」に向かって進歩し続けるだろう。理想社会では、人々はその本性を開花させ、自由と平和と幸福を享受できる様な調和状態で暮らしてゆけるはずである<sup>16)</sup>。貧困や戦争といった社会悪は徳性の欠如に由来する。普遍理性の尊重と反比例して、地理的特色、民族的個性、人種の特徴にはさほど価値が置かれなかった。世界には一元的な普遍文明が存在し、いずれかの国がその代表となる。啓蒙思想は世界主義、普遍主義の立場にあったのである。

ところが、啓蒙思想に大革命のもたらした幻滅に遭って事実上終りを告げ、

15) 次の諸論文を主に参考にした。野田又夫「啓蒙の哲学、ルソー、カント」(田中美知太郎編『哲学の歴史』1963年、所収)、赤木昭三「パスカルと十八世紀」(徳永恂編著『社会の哲学』1975年、第4章)、木崎喜代治「啓蒙思想」(田村・田中編『社会思想事典』1982年、第4章)、およびアイザイア・バーリンの諸論稿。

16) こうした考え方をラヴジョイは“uniformitarianism”(均一主義)と呼ぶ(前掲論文)。またバーリンは、「人類の諸問題についてまさに原則として調和的な解答があるという観念」=「完全な社会という思想」=「ユートピア思想」は西欧思想史の流れの中で古くから存続してきた「夢」である、と語っている。そしてその思想の背後には、①時空をこえた客観的価値の存在、②この価値の原理上の実現可能性、の信念が横たわっている、とバーリンは考えている。('西欧におけるユートピア思想の資額'『ロマン主義と政治』1984年)

啓蒙に対し陰に陽に対抗するロマン主義の思潮が表面に湧出してきた<sup>17)</sup>。ロマン主義は、とりわけ先進的フランス人に対するドイツ人の自我意識を起源としており、ナポレオン侵攻がこの高揚に油を注ぐことになる。民族尊重はロマン主義の根源的契機だった。ロマン主義の現実の担い手は新興の市民階級で、彼らの主張とロマン派の「個人の自由」・「自我の解放」のスローガンとは相互に通じるものがあった<sup>18)</sup>。ロマン派の多くは革命を熱狂的に迎えたが、恐怖政治と攻撃的ナショナリズムという革命の帰結が深い幻滅を彼らに味わせることになる。1770年前後に生まれたロマン派は「第一世代」と呼べるが、彼らは十八世紀の理想の崩壊を目撃、体験して「挫折」せざるを得なかったのである。

まず第一にロマン主義の個人概念についていうと、彼らは流動的生を基調に個人の独自性・個性性を尊重する。彼らは啓蒙思想が理性を過大評価したとして批判し、感情や直観といった非合理的側面の優位性を訴える。ただ注意すべきは、非合理のみを必ずしも称揚するのではなく、理性の過大評価を非難し、心情面もそれ相応に評価しなければ究極のところ理性も的確には機能し得ないと考えたのである。真理は客観的構造を備えるものでなく、探求者が独自に創造する。そこで、到達目標たる真理よりむしろその追求方法が問題にされ、探求過程そのものや動機が重視されるに至った。人間の独異性、不換性を重んじ具体的、個性の人間の心情を求めることは、夢や無意識層といった従来から無視されてきた局面に新たな道を拓く一方、人間の無限の発展を夢みることによってエリート尊重主義に陥る。第一世代におけるナポレオン、第二世代におけるバイロンは英雄待望論の典型である。彼らロマン派は「人間とは何か」を根源的に問うて斬新な人間像を探ろうとした。その意味でロマン主義は一種の「ヒューマンイズム」といえるだろう。

17) それ以前にもロマン主義の萌芽を見い出せる。啓蒙に異議を唱えたヴィーコ、ハーマン、ヘルダー、感情を重視したルソーらである。I. Berlin, "The Counter-Enlightenment", *Against the Current: Essays in the History of Ideas*, 1979, pp. 1-24. (前掲訳書, 43-82ページ) が簡潔な解説を与えている。

18) 篠田浩一郎『フランス・ロマン主義と人間像』1965年、第一論文、第四論文参照。



次に、ロマン主義は価値の多元性・多様性を承認するから、人間の特異性尊重と同様に、地理的には地域性・地方色が尊尚される。民族等の社会集団は有機的統一をなし、他の集団と異質の属性を備えるがゆえに独自の目的使命を持ち、価値あるものとみなされた。個々人も集団においてその生を発揚できる。各集団が異彩を放つから、あるべき「完全な社会」は一つではありえない。複数の理想社会が併存すべきだと考えられた<sup>19)</sup>。このことは極めて重要だと思われる。というのは、「民族精神」の言信による排他的血統信仰がロマン的社会観の負の遺産として残されたが、現在もなお世界の政治動向を左右するナショナリズムをその萌芽期において既に認めようとしていたといえるからである。

以上、多分にシニエマティックな形でだが啓蒙思想との対比でロマン主義の思想を瞥見した<sup>20)</sup>。

ところで、大革命の勃発当時フランスにおいてもドイツにおいても、革命とそれを導いた啓蒙思想に新近感を抱いたロマン派も少なからず居たことは先に触れた。ドイツではフリードリヒ・シュレーゲルやノヴァーリス、フランス語圏ではシャトブリアン、スタール夫人、そしてシスモンディがそうだった。ドイツでは、ナポレオン侵略による国民的屈辱からドイツ民族の誇りと自由の理想とが目覚め、統一国家建設を切望する声が高まった。この時の反ナポレオン闘争を支えた民族意識高揚の背後にはロマン主義の精神が介在したのであり、ドイツの自由解放の理念として働いた。しかしその反面、封建貴族はこの動きを利用して勢力を回復し、ロマン派は図らずも反動的ウィーン体制の秩序に順応してしまう<sup>21)</sup>。これが、ロマン主義は封建的意識の表明であるとして誤って規定された理由の一つなのである<sup>22)</sup>。

シスモンディのジュネーヴでも事態はさほど変らなかった。革命と反革命の

19) ラヴジョイはこの考え方を“uniformitarianism”に対して、“diversitarianism”と呼ぶ。

20) シェンクの前掲書（特に第一部「18世紀への反逆」）とバーリンの前掲書を主に参照。

21) 矢田俊隆「ロマン主義と民族概念」『岩波講座現代思想』第三巻、1957年。

22) 伊東冬美『フランス大革命に抗して』（1985年）において、著者はロマン主義の亡命貴族的起源を主張するが、それには納得しかねる。（168-169ページ）

闘争を経て彼の愛するジュネーヴはやがてナポレオンの支配下に入る。しかしあれ程革命の嵐に弄ばれた彼だったが、革命の精神には忠実であった。自由を求めた革命は歴史進歩の必然であるとし、それを踏みにじる反動勢力に対しては断固反対の立場を貫徹した。これは先のドイツ・ロマン派とは異なる。彼は当初ナポレオンの軍事的帝政に反対してサロンに参加していたが、1814年の百日天下の際にはそれまでの態度を翻しナポレオン擁護に回る。この行為は仲間からの孤立を招くが、本人は自己の信念に忠実だと思っていた。即ちウィーン体制は国際的反動の体制であり、その正当性原理によってブルボン家が復位することになると、幾多の困難を経て勝ち得た革命の諸成果が踏躐される危険性が出てくるだろう。旧体制の土地貴族復活は何としても阻止されねばならない、と彼は考えたのだった<sup>23)</sup>。この様に、フランス革命の精神とロマン主義のそれとの、「第一世代」における親縁性は、シスモンディにも認められるのである。

彼も具体的個人の自由と個性性を尊重する。ひとりひとりが掛け替えのない重みを持っているから、誰か他人の犠牲の上に立つ社会、およびその「進歩」を決して是認することができない。これはシスモンディの、ロマン主義に由来する人間尊重主義に他ならない。人は誰も徳性と幸福を追求するものだから、不幸——なかでも発生原因が主に人間に存する貧——は同じ人間の手で賑窮される必要がある。そしてシスモンディの場合、「知性クラウス・ド・ランテリジャンスの階級」が社会組織全体を方向づけ指導しなければならないとする社会観から、経済的不均衡には政府が介入すべきであるという視点が生まれた。政府の経済面への介入というシスモンディの経済思想を特徴づける視角には、その基礎にロマン主義的人間主義と啓蒙主義との共存がみられるのである。

### III シスモンディの人間観と古典派批判の基本的視座

シスモンディが経済学に眼を開いたのは『国富論』を通してであった。彼は後に立場を変えても生涯スミスを尊敬し、最高の讃辞を送って憚らない。彼に

23) 吉田静一『異端の経済学者——シスモンディ——』1974年、82-86ページ。

よれば、「アダム・スミスの学説は我々のものである。彼の才能がこの学問分野にもたらした松明は、彼の学派の人々に正しい道を知らせ、以来我々が成し遂げた進歩は全て彼に負っている。彼の思想が解明しなかったあらゆる点を指摘することほど、子供っぽくつまらないことはない。というのは、スミス自身知らなかった真理の発見さえも我々は彼に負っているのだから。」<sup>24)</sup> シスモンディはスミスを「創造的天才」と呼び、「深い賞讃」と「熱い感謝」を表明する、とまで述べている。この様に彼はスミスを経済学体系の真の創設者として評価し、この学問を正当に発展させねばならぬと考える。そして『商業の富』から16年、その間の経済動向とりわけナポレオン戦争後の恐慌(1815年)を観察し、イギリスの体制が非人間的だとして、その体制を主導した古典派経済学にロマン主義的土壌から批判の矢を向けるようになった。論難的なのは、彼の同世代人であるリカード、マカロックおよびセイといった古典派の第二世代に向けられるのである。

シスモンディは「知・情」共に均斉のとれた人間像を有し、その双方が秀逸であることが望ましいとみる。人間は誰も一貫して幸福を追求する存在だが、人々の幸福から物質と同様に精神的なものを欠くことはできない。彼は言う。「人間は精神的欲求と物質的欲求とを感じる混合的存在であり、彼の幸福もまた精神的諸条件と物質的諸条件から成っている。」<sup>25)</sup> まず彼は無人島に住むひとりの「孤立人」を想定し、富と労働の本来の性質を吟味する。孤立人は欲求充足のため労働し富を蓄積する。「初め孤立人は休息を得るために労働した。何もしないで享受できるように富を蓄積した。休息は人間にとって自然な嗜好であり、労働の目的であり、報償でもある。……人間は次の休息のためにだけ労働するものであり、費すためにだけ蓄積し、享受するためにだけ富を渴望するにすぎない。」<sup>26)</sup> この「労働の本質原理」は交換社会においても変わるもの

24) N. P., t. I, p. 50. (訳, 上, 77-78ページ) 但し, 邦語訳は吉田訳を一部参照し, 必ずしも菅間訳と同じではない。

25) N. P., t. I, p. 7. (訳, 上, 45ページ)

26) N. P., t. I, p. 76. (訳, 上, 97ページ)

ではない。休息が目的とはいえ、余暇はシスモンディにとって精神鍛練という積極的意義を持つものとして捉えられている<sup>27)</sup>。シスモンディは思慮深く合目的に行動する主体的人間を好ましく感じるのである。

ところで、労働はその伴侶として様々な美德、すなわち質素・忍・耐・節約等を働く者に養成する。そしてとりわけ自作農の、所有と経営の合体した農業組織——シスモンディは「家父長制的経営」<sup>エクスプロワタシヨ・パトリアル</sup>と呼称する——の下でそれが可能になる、と彼は考える。ここでの記述の中に彼の理想の人間像が描出される。つまりそこでの人間は、労働に満足が伴うから勤勉であり、経済変動のない比較的確実な世界に住むから将来への思慮に富んでおり、主に自然を相手にするから誤魔化す気持ちがなく誠実であり、さらに秩序ある祖国に愛着を抱いている。彼は、商人や製造業者の様な利に聡い者の中にでもなく、また日雇労働者といった日々の生活に否応なく追われる者の中にでもなくして、自ら幾許かの土地を所有し、営々とそれを耕作して生活する純朴な自作農民の中に、望ましい人間像を発見したのである。ジュネーヴ人シスモンディは生地スイスの自作農民に深い愛着と共感を抱いており、彼の理想の人間は正にそれを反映するものである。彼はスイス農民の素朴な心情に魅せられていて、故郷の牧歌的雰囲気は、各地を遍歴せざるを得なかった彼の気持ちを和ませるのに十分だったのだろう。またここでは、同じくジュネーヴ人であることを誇りに感じたルソーが想起させられる。

シスモンディの、一貫して幸福を追求し徳性が一定の望ましい環境や組織の下で純化・洗練されるとする人間観は、18世紀啓蒙のものである。現世における幸福追求は18世紀フランスで広範に主張されるようになってきていたが、彼もそれを継受して人間の行動目標の中心に置く。彼の経済学も従って全篇が「幸福」の理念に貫徹されている<sup>28)</sup>。また『新原理』執筆準備の際に、ジュネーヴの著述家エチエンヌ・デュモンを通して、ベンサム流功利主義の影響を受

27) N. P., t. I, p. 77. (訳上, 373-374ページ) 参照。

28) G. D. Desroussilles, "Sismondi et le gout du bonheur", *Economies et Sociétés*, t. X, n° 6, 1976, pp. 1313-1325.

けたことも指摘される<sup>29)</sup>。シスモンディは功利主義の基本命題「最大多数の最大幸福」を受容して「立法家」の行動指針に据えた。ただし、快樂（幸福）と苦痛（不幸）は単一の尺度では測れないから、その計算可能性については反対した。こうしてベンサムの影響を間接的に受けつつ、啓蒙のスローガンの一つである「幸福」の理念——英仏を先頭に広く主張されていた——を彼は受け継いだと考えられる。

また彼は、人民を文明に導くために蒙を啓く立法家の役割を重視する。これは後で触れねばならないが、指導者としての立法家も国民全体の幸せを目標に置いて行動することが要請される。彼の場合、経済学も統治の学問であるから「政治経済学」に他ならない<sup>30)</sup>。すなわち、「統治の科学」(国政学)は「政治経済学」と「政治学」とから成るが、前者は国民の物質的欲求を満たす国富の管理を教える学であり、後者は精神的幸福のうち政府の仕事となる部分を教える学である。国民は自由・知識・美德・希望の有益な影響を受けて精神上の幸福に至る。「政治学は、自由によって市民の精神を高揚し崇高にする憲法を、市民の心を有徳にまで高め知性を文明に開く教育を、さらに現世の苦悩を償うため来世の希望を提示する宗教を、それぞれ国民に付与することを教えなければならない。」<sup>31)</sup> なんと啓蒙主義的な叙述だろうか！「統治の科学」は「一般的福祉」または「国民的幸福」を課題とし、「人間の本性と両立できる最高度の福祉を彼らに保証する方法」と同時に「できる限り大多数の個人をこの福祉に参加させる方法」の探求を目的とする。立法家はこの二重目的を見失うことがあってはならない。人々の幸福の二重性に呼応して、国政学は政治学と政治経済学の二大部門を通じ国民の幸福達成に寄与せねばならない、と言うのである。

29) N. King, "Sismondi liberal", *Economies et Sociétés*, t. X, n° 6, 1976, pp. 1281-1282.

30) l'économie politique が統治の学に属するというのは、19世紀初頭までのフランス経済思想における伝統的考え方だった。木崎喜代治『フランス政治経済学の生成』1976年、序章第一節を参照。

31) N. P., t. I, p. 7. (訳上、45ページ)

シスモンディの人間論からの古典派批判はおおまかに言ってふたつある。まず第一に、イギリス古典派経済学における人間は目的と手段とも倒錯しており、国民経済のレヴェルにおいてもそうになっている。元来、一般的な富もしくは国富はその享受が目的に他ならず、富の追求はそのための手段であるはずだ。しかるに、スミスといえども実はそうなのだが、イギリスの経済学者達は資本蓄積を人口との関係を見捨てて「抽象的に」考察している。産業革命が破竹の勢いで進展し資本主義が体制的に確立しつつあるイギリスでは、確かに生産力は飛躍的に伸長したものの、肝心の悦楽は減少している、と彼は断言する。「この富は果してイギリスの商業家にそれが保証するに相応しい種類の幸福を確実に与えただろうか？ 否。……この目覚ましい物的富の増進を示す国民的富裕は、最終的に貧者の利益になったのか？ とんでもない。……では蓄積されたこの膨大な富の成果は一体何なのか？ それは、労苦や窮乏や完全な破産の危険を全階級に遍くさせたこと以外、なんらの結果をももたらさなかったのではなからうか。イギリスは物質のために人間を忘れ、手段のために目的を犠牲に供したのではなかったのか。」<sup>32)</sup> 古典派経済学の理想としての「自然的秩序」が「現実的秩序」と化してまさに眼前に現れた時、シスモンディは深い失望感を味わるを得なかったのであり、その衝撃と動揺から、イギリスの産業体制と経済学者に向けてこのような仮借のない論難の言葉をぶつけるのである。それは彼らがひとえに「抽象」に陥っているからだと言はう。この言葉は批判の際の常套語となっている。彼は現実感覚の豊かな思索家であって、抽象的原理を論じる際にも絶えず各国・各地の現実状況を意識していた。論理、一般法則、推論等を軽視するのではないが、これらは現実の支えがあって初めて有効になり、生きたものになると確信していたのである。彼はこの資質を恐らくロマン主義の歴史探求によって磨いた。そしてこれは、彼の政治経済学の大きな特色の一つと言って間違いないだろう。

古典派批判の要点の第二は、ホモ・エコノミクスの非妥当性である。経済学

32) N. P., t. I, pp. vi-ix. (訳, 上, 361-363ページ)

における人間は、古典派では経済的選択を合理的に行う「経済人」として指定されるのは周知のところである。経済学は、重層的、多面的な社会関係の中から経済システムのみを独自の自律的領域として孤立化させ、抽出する。この体系内の人間は具体的人間を経済的側面からモデル化したものだが、シスモンディは人間の一面化に満足できない。具体的人間は知・情両面の様々な性格が本質的に一体となっており、従って経済人としてだけ分析すると正しい認識に到達できない。彼はこう述べている。「一般に政治経済学では、あらゆる抽象と同様に絶対的命題をも疑わねばならない。……いかなる抽象も常に欺瞞である。同様に、政治経済学は計算の科学ではなく一つの<sup>シオシス・モラル</sup>道徳科学である。それは、数によって導かれると信じられる時、道に迷ってしまう。それは、人間の<sup>サンチマン</sup>感情・<sup>ブズワン</sup>欲求・<sup>パツション</sup>情念を評価する時にのみ目標に達する。」<sup>33)</sup> 繰り返すが、論理展開や抽象の方法が不要と言うのではない。肝要なことは、これらの方法が実体への第一次接近に過ぎず、その後の具体的・現実的人間認識が予想されていなければならぬ、ということである。これは、シスモンディの具体的人間を尊重する態度の表明だったのである<sup>34)</sup>。

#### IV 歴史の探求から

ロマン主義者の多くは各国民の独自性探求を目的に過去の歴史に深く分け入った。シスモンディはコッベの時代に、特に歴史家ヨハネス・フォン・ミュラーの手ほどきに従ってイタリアとフランスの過去に想いを馳せた。この時の成果が『中世イタリア共和国史』と『フランス史』である。中世復興はロマン主義の功績とされるが、彼もミュラーと並んで功労者のひとりとなった。

シスモンディは18世紀啓蒙の歴史観を基本的には継承する。啓蒙思想家は進歩の観念および人間の完成可能性を楽天的に信奉したが、彼も1814年にジュネ

33) N. P., t. I, pp. 312-313. (訳, 上, 245-246ページ)

34) 「人間の問題」を前面に押し出したシスモンディの「古典派経済学における人間の不在」批判とその限界については、岡田純一「シスモンディ経済学の基礎構造」『経済学における人間像』1967年、を参照。

ーヴのサン・ピエール大聖堂で進歩と自由を賞揚する歴史哲学の講演を行ったし、また『新原理』にもそれは窺える。とはいえジャコパンの恐怖政治とその後のヨーロッパ的規模での大変動を経過した後に、この様な意見を表明していることに注意しなければならない。動乱の中で彼は数度にわたる投獄と釈放の憂き目に遭い、家の財産も没収されてしまう。ジュネーヴに留まることさえも危険になったため、イギリスやトスカーナへ逃れたのであった。彼の敬愛する母親が革命に深い嫌悪感を抱いたのも当然であろう。だが当のシスモンディ自身は革命の主導精神たる自由の原理を生涯信じた。個人的境遇を顧慮するならば強靱な意志の持ち主だったと言えよう。彼によれば、自由はいずれ各国民に拡がり、それが条件となって人類は幸福に向けて進歩する。野蛮・未開状態から脱け出て文明に至るのが人類の必然である。フランス革命は、革命という軋轢の多い過激な手段に訴えたことに関しては、貴重な人間の具体性の軽視であるから是認できず、もっと漸進的で穏和な手段を採るべきだった。とはいっても、自由が確実な地歩を占めるに至ったことは人類にとって重要であり、それを決して後退させてはならぬ、という強い信念は決して棄てることはなかったのである。

彼はスミスやテュルゴーらにみられる経済発展の「四段階論」を踏まえていた。社会は文明の進歩に従って狩猟・漁撈、牧畜、農耕、商業と発展の階梯を登る。もちろんこの理解の背景には、過去からの社会発展の歴史認識と現実世界の多様かつ不均等な状況認識、このふたつの重ね合わせがあった。彼は一種の進歩史観を奉じるが、それは例えばコンドルセの様な直線的、夢想的なそれではない。長期的にみれば人間社会はより善い文明へと発展するが、その過程においては揺れ戻しの時期をも時には包含するというものである。

彼によれば、完全な野蛮状態にある者は狩猟・採集・漁撈の生産物で養われる。そこからの移行について、何が原動力になるのか明示的には語らないが、自由の意識といういわば観念的要因があることは間違いない。ともかく文明の進歩によって獵人生活の次には、例えば当時では東方平原のタタールにみられ



る様な牧畜生活が続くという。さらに遊牧民族が農業生活に入るのも文明の進歩である。人類が初めて土地に定住して農耕生活を営んだ最初の制度は、彼の言う「家父長制的農耕制度」であり、そこでは人々は自由かつ幸福に暮らせただろうと想像する。彼は農業生活に極めて深い愛着を感じ、その多様な諸制度を詳細かつ具体的に分析し記述している<sup>35)</sup>。「家父長制経営」は一部の地方を除きほとんどの地方で「奴隷制的農業経営」(典型は古代ギリシャとローマ)に取って代わられたが、これにより農民の自由と幸福は喪失された。歴史の退歩である。しかしそこから再び文明への進歩が始まる。中世に至り、様々な経営組織が地域を異にして生成する。「分益小作経営(収獲折半<sup>エクスプロワタシオン・セルツァイル</sup>経営)」(イタリア・スペインの一部地方)、「賦役経営」(ハンガリー、ボヘミア、ポーランド、ドイツ)、「人頭税経営」(ロシア、フランス・イギリスの諸地方)がそれらである。ここでは、現実の多様性を踏まえた類型論的把握が明瞭にみられる。総じて啓蒙の時代にあっては、中世は現在によって既により越えられた暗い時代として否定的心象で捉えられていたのは周知のことである。ロマン派は中世を従来とは異なった眼で受け止めた。例えばノヴァーリスやフリードリヒ・シュレーゲルは中世精神の敬虔性・清純性に魅せられ、中世世界を理想化した。ロマン派は想像力を駆使し、主観主義的傾向を含みつつ過去の民衆に直接的に同感しようとした。彼らの眼には、中世はキリスト教信仰が普遍化する輝ける時代に写ったのである。シェンクによれば、「文明の崩壊」という「不吉な予感」を直観的に洞察した挙句、未来に対してよりもむしろ「過去に向かって郷愁の目差を投げかけ、更にはある過ぎ去った時代に生きようとすら試みる」という重要な性格が、ロマン派の思索家達にはあった<sup>36)</sup>。シスモンディも、当時破竹の勢いで進行中の産業革命、すなわち機械文明の到来とその行く末に暗澹たる前途を直感し、悲鳴をあげたように思われる。しかし歴史への彼の態度には、敬虔な中世精神に共感するという

35) 『新原理』第三篇がシスモンディ独自の農業経営制度史となっていることは知られている。吉田静一、前掲書、1982年、第一章参照。

36) Schenk, op. cit., p. 33. (訳44ページ)

面もないわけではないが、むしろ中世世界に一定の距離を置いて眺め、そこから現在に有効な諸要素を教訓として抽出するという実用主義的な解釈もしくは傾向が強かった。彼は近代を一応評価し、中世をその世界全体としては余り評価しない。この点でも啓蒙的である。中世に関し、「混乱の渦中」とか「人間に概念を一般化する力が失われてしまったのではないと思われる中世」とか述べている。

彼の歴史観において、中世以後の発展で特に重要な問題となるのは、高度な生産方法で田園を支配しつつあるイギリスの農業制度である。一部の地方では、奴隷身分を脱した借地農業家が中核になって「定額小作経営」<sup>エクスプロワタシオン・パール・バニュー・フ・フェルム</sup>が出現した。そして特にイギリスではこれの大規模な耕作が支配的になったが、シスモンディは「誤った道」に入ってしまったと非難する。これについては、フランスとの対比で後に論じなければなるまい。

この様に彼は啓蒙期の歴史観を基本的には信奉する。そしてその進歩は漸進的で一進一退を含んでいる。彼は人間の経験から教訓を学ぶために歴史を振り返るのであって、その中に逃避的に生きるためにではない。問題意識は現在から未来へ向けられている。とはいえ、中世に誕生した北イタリアの自由都市や職業団体の歩みを綴ることによって、「シスモンディはフランスにおける歴史の道を開拓し」（ミシュレ）、中世復興者のひとりとなったことも確かである。また、家父長制的農耕制やギルドを郷愁の眼で眺め、ある程度理想化するなど、ロマン主義の特性も確実に備えている。彼の思考は歴史的である。現在を判断または批判する際に、過去をその基準に置くからである。彼のあるべき社会像、すなわち「理想郷」は歴史のうちから学んだものである。次にこれがいかなるものかを検討しなければならない。